

OSAKA・II ZONTA CLUB

大阪Ⅱ ゾンタクラブ第39号(2015年3月)



巻頭言

会長 田中 茂美



あけましておめでとうございます。平素よりエリア3のクラブの皆様、当クラブの皆様には多大なご尽力を賜り、心から感謝しております。本年もよろしくご指導をお願いいたします。

瞬く間に時が過ぎ、早くも2014年度の行事は後5ヶ月(5月末まで)・後半となりました。荣誉なる大阪Ⅱゾンの会長職は身につかないままにアタフタと日々が過ぎました。反省の日々です。元来社交性と協調性に乏しい私ですが、常に感謝し、学ばせていただいたのは、クラブ同士のお付き合いの美しさです。広報誌を送らせていただいた時もたくさんのクラブ会長様から励ましや感想、御礼の言葉を頂きました。また、多くのクラブから広報誌・イベント紹介を送っていただき、多くのクラブがチャリティーイベントや活動にスタイルを持っておられ、イベント収入に応じた寄付活動をしてられることを改めて認識しました。当クラブの活動のあり方も長期に亘っての見直しが必要な時期が来ているのかも知れません。前半には、卓話2件・移動例会2回・銭太鼓チームの施設訪問・親睦食事会・九州グルメ旅行・忘年会と楽しい催しが満載でした。後半には、チャリティーイベント(随一の収入源?)が控えています。皆で盛りたてて成功を期したいと思います。

また、この冬は厳寒のせい、お年寄りの逝去が例年になく多く、私は仕事柄、繁忙が11月末から継続しています。家庭・さまざまな施設・病院と場所はいろいろですが、ご本人にとって「幸せ」な最後に出会うことが以外に少ないなあと感じることが多々あります。背景として浮かび上がるのは「親子関係・夫婦関係・他親族関係:人間関係」「お金の関係」です。最後の時期が近くなると、ご本人のかねてからの希望等は無視されがちで「後見人」の親族の意思が最優先されてしまうことが多く最後の場所も選ぶことができず、不安と苦しみにあえぐ高齢者を診ると、人と人との結びつきに儂さを感じます。自らも60歳を過ぎ、周囲に高齢者も増え、仲間入りも近くなりつつあります。この辺で美しい人と人の関係・美しいお金との関係・どんな高齢者になり、何が幸せなのかを考えて、努力を惜しまず自らに課せられた責務を果たしながら、淡々と「自分スタイル」をつくりあげて生きたいものだと思います。

思いつくままに・・・ 人生も長期に亘って見直しが必要な時期がきているのかも知れません。

チャとツバキ

牛田 三千子



2014年9月例会で山口聰先生を卓話講師にお招きし、「チャとツバキ」と題する日本の緑茶のルーツに関するお話を伺いました。最初「茶と椿」という題名から茶道のお話かと思っておりましたが、伊予つばき協会会長、農林水産省フェロー、農学博士でいらっしゃる山口先生のお話は茶葉のDNA分析からそのルーツを探るといった学術的なお話でした。

チャは、学名カメリアシネンシス (Camellia sinensis) といい椿の仲間であるとのこと。

このチャから、製法を変えることによって緑茶もウーロン茶も紅茶も作ることができ、今も世界中で愛飲されています。しかし茶は製造し終わってからその出来不出来が分かるため育成が難しい作物であるといわれます。

農林省の研究所では、毎年「利き酒」ならぬ「利き茶」があり、銘柄を隠してお茶を飲みその名前を言い当てるそうです。山口先生はほとんどを正解されるとのこと、それもそのはず、子供の頃から玉露を飲まれていたそうで、お茶の甘さ、渋さ、まろやかさ、香りや色が長年の間に舌や鼻にインプットされているのでしょう。

日本の茶は、遣唐使が中国に行くなどして両国に付き合いが始まってから、奈良平安の公家たちが飲んでいたそうです。当時は茶を砕き、粉にして塩を入れて飲んでいたと言われていました。もちろん当時は誰も知らなかったでしょうが、成分のカフェインから覚醒作用などの薬効があったのでしょう、写経する坊さんの間でも眠気覚ましに支給されたといえます。

平安時代、嵯峨天皇の時代には御所の一角や、貴族の荘園で茶の栽培を行っていました。その後室町以降、栄西が茶道を中国から持ち帰り武士の間でも広く流行しました。

今から20年前頃は中国では茶をはじめ6大植物群は国外持ち出しを禁じられていました。中国の茶園は「秘密の花園」のようで見るとはできても茶葉を持ち帰ることは不可能でしたが、先生の長年の信頼関係から少しずつ持ち出すことができるようになりました。そこで持ち帰った中国の茶や日本の茶のDNAを取って分析してみると中国産と日本産の差は僅かであることが分かりました。一方、日本製とインド産アッサムとは大きな違いがあることが分かりました。

また、短いめしべは日本産、長いめしべは中国産と言われてきましたが必ずしもそうではなく、日本のお茶でも宇治茶は静岡茶に比べ長いめしべが多く、また中国茶にも短いめしべのものがあることが分かりました。

このようにDNAの解析から中国と日本の交易により、両国の茶も互いに往来したことが分かり歴史の面からも興味深くお話を伺うことができました。

山口先生のお名刺には「No Flower No Life No Breeder No Flower」と印刷されています。花なくして人生はなく、生産する人の手なしではその花は咲かない、と言った意味でしょうか。先生の植物に対する熱い思いが伝わってくる言葉です。

秋も深まると温かい日本茶が恋しくなります。中国と日本の茶の往来に思いを馳せつつゆっくりと美味しいお茶を味わってみたいと思いました。



姫路城

佐野 由紀子



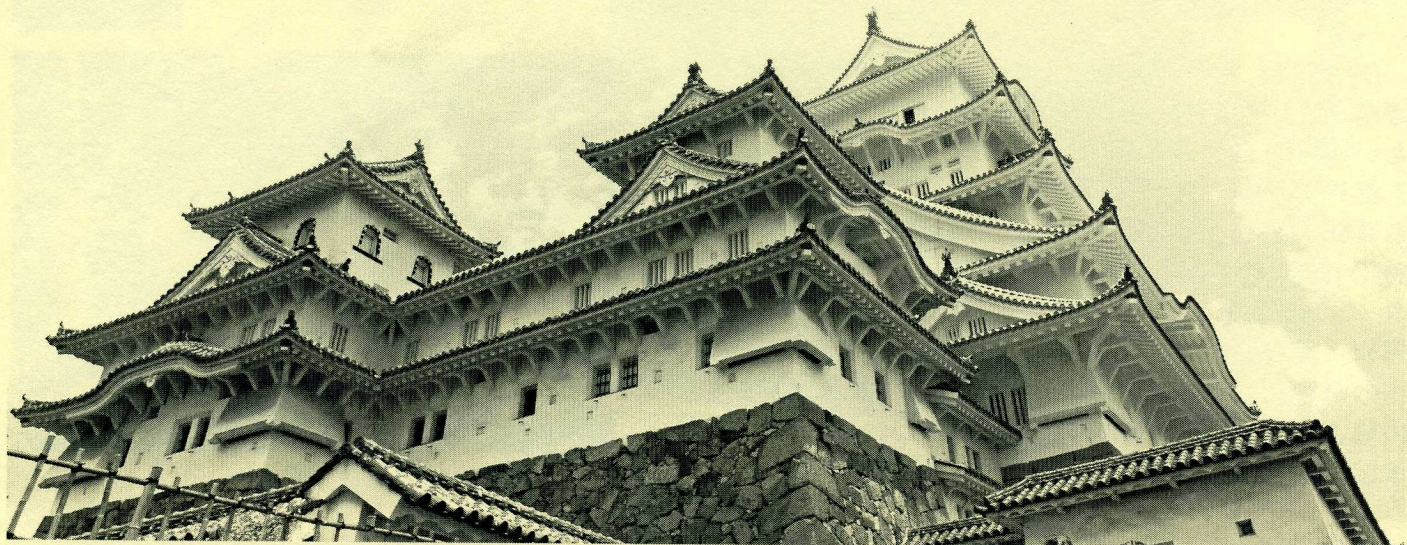
10月5日に移動例会で、姫路城に行って参りましたので報告いたします。

お恥ずかしいのですが、私は歴史・文化に疎く、姫路城については、世界遺産に登録された白鷺城として知られているとても美しいお城だ、ということくらいしか知りませんでした。大型台風18号が接近している時でしたので、雨・風を心配しながら姫路に向かいました。姫路に降り立つと、大勢の外国の観光客の方を見かけ、さすが世界遺産登録の効果だと感じました。

駅近くのホテル日航の和食レストランに集合し、さっそく川富弁当を頂きました。この例会を企画してくださった河村さところ様をはじめ、10名が集まりました。美味しい昼食をいただいた後、タクシーで姫路城に向かいました。

姫路城は、2009年から大規模な保存修理中で、しばらく見るができなかったのですが、やっとこの6月に外壁修理が終わり、その美しい姿を見ることができるようになっていました。「あまりに白すぎる」との評判もある改修後の姿のようですが、瓦と瓦を止める漆喰がまだとても白いためだそうで、もう少し時間が経つと黒っぽくなって落ち着いてくるのだそうです。ただ、来年3月まで天守内部の改修は続いており、入ることはできないとのことでした。そのため、通常と少し違ったルートでしたが、ガイドさんの案内で城内を見学させて頂きました。徳川家康の孫娘「千姫」が姫路城に住まわれていた時、侍女たちが暮らしていた「長局」といわれる建物の中をおもに見学致しました。240mの長い廊下に沿って侍女が住んでいた部屋がずっと並んでいました。なかには畳敷きの部屋もありましたが、多くは板張りで、冬はさぞ寒かっただろうと想像されました。窓も外からの侵入者を防ぐために太い格子が入り、長い廊下は細く薄暗く、急な階段もあり、この中を着物姿の侍女たちが歩き回っている様子を想像すると、つくづく現代に生まれてきて良かったと感じました。その後も、第二次大戦中にどうやってお城を守ったか、というようなガイドさんのお話にうなずきながら、秋の一日、しばし昔の日本の姿を楽しみました。

ちょうど観光ルートを終わるころに、計ったかのように少し雨がパラパラしてきましたが、たいしたこともなく、無事例会を終えることができました。お城というと建築物しか思い浮かばず、その中に住んでいた人の生活や文化などには余り思いが至らなかったのですが、今回詳しいお話を伺うことができ、昔から続く文化としての姫路城を感じることができました。ありがとうございました。



ジャンリス夫人の女子教育論

坂本 千代



2014年11月13日の例会で大阪府立大学教授の村田京子先生に「ジャンリス夫人の女子教育論」という卓話をさせていただきました。村田先生はバルザックをはじめとする19世紀フランス文学の専門家で、最近ではジョルジュ・サンドなど女性作家に関する本をたくさん出されています。

ジャンリス夫人(1746-1830)は日本ではあまり知られていませんが、18世紀末から19世紀前半にかけて活躍したフランスの女性作家です。

村田先生は夫人の代表作『アデルとテオドール』における女子教育論を取り上げられました。有名なルソーがひとりの少年の教育法について書いた『エミール』とは違い、この小説では女性の劣等性が否定され、男女がほぼ平等であることが述べられています。実生活では、のちにフランス王となるオルレアン公爵家のルイ・フィリップの養育掛りとして、ジャンリス夫人は自分の教育方針を実践しました。また、学問だけではなく、健康・衛生にも気を配り、3歳の女の子にもコルセットをつける当時の習わしに反対しています。ただ、ジャンリス夫人は、女性に男性と平等の政治的・社会的権利を与えるべきだと主張していたわけではなく、女性の知的能力の発揮はあくまでも家庭内に留めるべきだとする良妻賢母主義を説き、そこに18世紀の貴族の女性である彼女の限界があったとのこと。しかしながら、理想の教育を論じながら、現実では実子を5人とも捨て子にしたルソーと違い、娘ふたりの他に甥や姪、複数の養子、オルレアン家の4人の子どもたちを教育したジャンリス夫人の教育論は経験に基づいたもので、教育者としての自負が感じられるものだそうです。

パワーポイントと詳細な配布資料を駆使した50分ほどの卓話は、かなり専門的な内容ながらとてもわかりやすく、革命前後のフランス上流階級の人々の教育内容について楽しく学ぶことができました。

納涼会(2014.8.31)

空中庭園展望台

内藤 恵子



8月31日、空中庭園展望台に行きました。天候に恵まれ、素晴らしい展望でした。大阪を訪れる外国人観光客の行きたい場所の2～3位といわれています。展望台では、6～7割外国からの観光客でした。市街地は、高層ビルが立ち並び、淀川の流はゆったりと大阪湾に注いでいました。360度見えるので、素晴らしい景色でした。その後、インターコンチネンタルホテルの20階NOKAで会食しました。河村、佐野、白石、田中、内藤、中塚、幡山、久岡、芳川の9名に、ゲスト2名(元タカラジェンヌ夢華あみさん、内藤こころ)で、ガラスのお部屋で楽しいひと時を過ごしました。



ゾンタの愉快的音楽隊

宮本 典子



大阪IIゾンタクラブに銭太鼓チームができていろいろな施設に慰問にゆくようになってはや10年あまりたちました。銭太鼓のレパートリーを増やしたいのですがそれはとても難しいので検討の末、ハンドベル演奏に落ち着きました。エーデルワイスや喜びの歌、ミカンの花咲く丘、などを持ってお年寄りの所へ行ってきました。さらに今回、子ども向けの曲も練習しました。もののけ姫、さんぽ、キラキラ星変奏曲、などです。

そして8月28日四恩学園の地藏盆にお伺いしました。四恩学園の地藏盆は、始めにお地藏様へのお参りがあり、その後子ども達の数珠まわし、私達の銭太鼓、そして盆踊りがありご近所の子ども達も加わって、それはそれは盛大なものでした。

打ち上げのときハンドベルもしているの、名前を付けようと云うことになり、「ゾンタの愉快的音楽隊」に決まりました。



子ども達の数珠まわし



銭太鼓チーム

第2乙訓ひまわり園

白石 多津子



「ゾンタの愉快的音楽隊」とネーミングも新たに12月12日金曜日、京都府向日市にある障害者総合支援センター「第2乙訓ひまわり園」に奉仕活動に行かせていただきました。銭太鼓は『花笠音頭』を、ハンドベルは、『七つの子・きらきら星・さんぽ～となりのトトロ～・もののけ姫・ミッキーマウスマーチ・聖しこの夜』を演奏しました。

ご用意していただいたホールには50名ほどのメンバーに集まっていたが、はじめは緊張したムードもありましたが、ハンドベルの音色と聴き覚えのある曲が流れると一緒に歌ってくださり、とても和やかなムードになりました。

私は、今回初めて奉仕活動に参加させていただきました。その中で、見たこともない「銭太鼓」を覚えることができました。また、小学校以来のハンドベルに触ることもできました。なにより楽しかったのは、当日までにメンバーで練習をする日です。宮本典子先生のご厚意で先生宅で練習日に集まります。それはそれはみんなで一生懸命練習します。なのになぜか笑ってばかり・・・全員が「箸が転んでもおかしなお年頃」に達しています。そこには不思議な魅力のある関係性が築かれる、そんな貴重な時間が流れます。

今回伺った「乙訓ひまわり園」が基本理念とされているのは「共生」。地域の中でいきいき生活することを願い、共に生きること、自然との共生、人と人の共生です。障害の種別に関係なく、「共生」それはすべての人に同じことです。

そして最後の曲は、リクエストをいただいておりました、アナと雪の女王の『レット・イット・ゴー』です。振付も交えながら皆さんで大合唱です。「降り始めた雪が足跡を消しました。真っ白な世界にひとりの私があります。風が『このままじゃダメなんだよ』と心にささやきます。とまどって、傷ついて、誰にも打ち明けずに悩んでいたのですが、それももうやめます。ありのままの姿見せよう！ありのままの自分になろう！何も怖くない！風よ吹け！少しも寒くない。」と、社会現象にもなった歌です。

奉仕活動の意味ってなんでしょう？初めての参加で感じたことは、「楽しさを分け合う、そんな贅沢な時間を共有すること」だと思いました。今後も奉仕活動を通じて成長していきたい。私にとってヤミツキになりそうな活動です！



創立30周年記念行事参加報告

西村 博子



京都Ⅱゾンタクラブ 創立30周年 おめでとうございます！

創立30周年の記念式典・記念講演・祝宴は、深まりゆく秋の日、2014年10月19日(日)に京都ホテルオークラにて開催され、私たちクラブから会員9名がお祝いに参加いたしました。

1984年3月6日 京都Ⅱゾンタクラブは、京都ⅠクラブをSOMクラブとして誕生されました。30年のご活動の中に、設立10周年には京都雅クラブを、15周年には大津クラブをシスタークラブとして誕生させて、また海外の台湾やカナダ・ビクトリアのクラブとも姉妹提携されています。当初のチャーターメンバーのうち、14名のメンバーがいまなおご健在で、現在は41名の会員がその活動を支えられています。多くの会員ですね！

式典は国際会長のメッセージから始まり、粛々と進行されました。なかでも、30周年の記念事業として、国際ゾンタ財団への寄付もさることながら、国内の子供たちへの支援ということにターゲットをしぼられてのご寄付・支援に、深く感動いたしました。

記念講演では、寛人親王殿下の第一子女の彬子女王殿下をお迎えされて、日本の文化を未来に伝えるために一心游舎の試みと題されてのご講演を拝聴いたしました。幼い頃にスコットランドのタータンに興味をひかれて探求がはじまったというご経験をはじめ、その後の英国での留学をはじめさまざまな人との関わりの中で、現在は心游舎を立ち上げられて、

日本の文化を子供たちに伝える活動に取り組みられています。パワーポイントを駆使されてのご講演、とても美しい日本語で話され、わかりやすく、そのご聡明さに深く感じ入りました。日本の文化のさまざまな事柄を子ども達が体験する、それを楽しいと思うことが、日本の文化の継承につながっていく、未来のために、体験も含めた記憶のタネをまくことの大切さを述べられ、子供たちに関わる組織で働く私は、大いに共鳴いたしておりました。

祝宴では、すばらしい祝舞をご披露いただき、またヨーロッパのお料理をご専門とされます会員の方のご推薦のお食事を賞味いただきました。ご馳走さまでした。

こうして、京都Ⅱクラブの会員の皆さまから、あたたかいおもてなしを受けて、30周年をともにお祝いすることが出来て、感謝の一日となりました。今後のますますのご活躍をお祈りいたします。



京都Ⅰゾンタクラブ

秋のチャリティイベント参加報告

河村 さと子



11月5日(水)、秋晴れのすがすがしい一日、毎年恒例の京都ⅠZCチャリティイベントに参加しました。チャリティイベントには、お茶席、昼食会、各種バザーの各ブースが設けられています。さらに、午後1時より青雲の間に設営されたコンサートルームにおいて、私、河村さと子のソプラノと富岡潤子さんのピアノによるゾンタサロン・秋のリサイタルに出演し、日本歌曲やドイツ歌曲、そして、オペラアリアや宝塚歌劇の名曲の数々を披露しました。

このコンサートの冒頭で、かねてより京都ⅠZC前会長尾崎佐智子姉より制作依頼のあったゾンタクラブ新愛唱歌「ゾンタの黄色いバラ」の発表を行い、出席のゾンシャン達から、好評を得ました。この歌は、ゾンタクラブのそもそもの発祥地アメリカの有名なフォークソングを私がアレンジしたもので、明るく歌いやすい曲ですので、26地区の各クラブでこれから歌って頂いて、少しずつ広まることを期待しております。

約1時間のコンサートを200名以上のお客様方が楽しんでくださり、素敵な秋の1日となりました。



九州大分の旬を楽しむ旅(紅葉・温泉・美味)

芳川 た江子



2014年大阪Ⅱゾントクラブの秋の親睦旅行は「九州の秋を楽しむ旅」でした。耶馬溪の紅葉・長湯温泉・臼杵トラフグを存分に楽しみました。いつもながら、田中茂美先生の企画力には感服いたします。私事ですが、5年前に入会して以来この秋の親睦旅行には全参加しています。

11月23日(日)新大阪7:15発のさくら号にて九州へ出発しました。朝早かったですが、誰も遅れることなく、参加者は尼木・牛田・笠置・坂本・笹岡・田中・辻・内藤・中塚・幡山・芳川の11名でした。小倉駅でJR特急ソニック号に乗り換え、中津駅まで行きました。JR特急ソニック号は一番前の車両のグリーン車で運転席がよく見え、さらに前に続く線路も見え、まるで自分が運転しているみたいな感覚になりました。中津駅で降りると、田中茂美先生が手配してくださったマイクロバスの運転手さんが迎えてくださり、耶馬溪・青の洞門・福沢諭吉旧居・中津城などを観光しました。中津市は、山国川河口の中津平野に栄えた奥平10万石の城下町で、武家屋敷や寺町といった古い町並みが残る静かな街で、近年は福沢諭吉の故郷としても名高いです。山国川をさかのぼると、無数の奇岩がそそり立つ耶馬溪に入ります。耶馬溪の紅葉が有名ですが、ちょうど私達が行った時は紅葉が見頃で、関西では見られない雄大な山の紅葉にしばし見とれていました。その後、青の洞門のところをマイクロバスで通り、福沢諭吉旧居・中津城などを見学しました。

昼食は、重要文化財に指定されている筑紫亭にて鰻料理ミニコースをいただきました。筑紫亭は、明治34年創業の鰻料理を日本で初めて出した料亭で、ここには福沢諭吉や広瀬淡窓の掛け軸をはじめ貴重な歌碑や絵画、書などがさりげなく飾られていました。そのとても広い部屋に私達11名の為にテーブルと椅子が用意されており、新鮮な鰻料理をいただきました。音響効果もよく、コンサートなどもされているそうで、皇太子殿下なども来られたことがあるそうです。又、この料亭では「食が命。食が精神や魂を育てる」という考えから、日本民族の本来の身体に適した食材を使い、人の手を介した料理を続けているそうです。

その後、マイクロバスで一路長湯温泉へ行きました。長湯温泉は外湯ラムネ温泉が有名で、翡翠之庄(かわせみのしょう)に泊まりました。翡翠之庄は、敷地3万坪にたった10部屋と貸切風呂が点在していて、各部屋に露天風呂がついています。たった10部屋のうちの4部屋に私達は泊まり、あみだくじで部屋割りをしました。少し狭い部屋が2名で、あとの3部屋は3名で泊まりました。私は、2名の部屋に当たりましたが、部屋についている露天風呂が源泉かけ流しで、又岩盤浴もついていて、ラッキーでした。1部屋は少し遠かったですが、特別室のようで部屋もたくさんありました。夕食はエノハという川魚中心のメニューでしたが、ここでしか食べれないというエノハの御造り・唐揚げ・塩焼き・茶漬けと堪能しました。又、豊後牛しゃぶしゃぶやあぶり焼きや、ここで取れた新鮮な野菜もたくさんあり、大満足でした。食後、各部屋の散策に行き、その後各自の部屋でゆっくりしました。

翌日11月24日(月)は、9時に宿を出発して、竹田荒城の月：岡城・武家屋敷・滝廉太郎記念館)をミニ観光しました。岡城は、文治元年(1185)緒方三郎惟栄が、源義経を迎えるため築城したと伝承されています。少年期、荒廃した岡城に遊んだ滝廉太郎は、この城のイメージにより、中学唱歌「荒城の月」を作曲したといわれています。

昼食は大分市内のふぐ良茶屋で、名物の臼杵のトラ河豚を堪能しました。河豚きも付きのてっさは見事な菊盛りで、唐揚げ・鍋・雑炊フルコースで、味は大分一といわれる人気店でした。

帰りはJR大分駅からソニック号で小倉まで行き、のぞみに乗り換えて新大阪まで帰ってきました。天気もよく、紅葉も見頃で、又とても美味しい食事にも堪能し、お宿もすばらしく、大満足の九州旅行でした。



編集後記

辻康子前広報委員から、引き継ぎを受けて今号から宮本、坂本委員と共に広報を担当いたします。以前担当していた時とは全く違いコンピューターを使っての編集ですので、少し戸惑っております。会員の皆様は快く原稿を書くのを引き受けて下さいますので心強く思っております。大阪Ⅱゾントクラブの活動が手に取るように分かるような広報紙を作っていきたいと思っております。

笠置 伸子